

平成二十七年 入学試験問題

国語

第一回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学校三年生の娘の「道徳」の教科書をばらばらとめくっていると、「ハッピーマナー」というタイトルの面白い話が載っていました。電車への駆け込み乗車に(2)を立てていたはずの友人が、赤信号を(7)ムシして道路を走って渡(わた)るのを、主人公たちが見たという話です。

ここでは二つのことが前提となっています。ひとつ目は、駆け込み乗車はいけないということ。もうひとつは、赤信号で道路を渡るのはいけないということです。もう少し教科書の話の内容を説明しますと、主人公たちは、駅に駆け込み乗車を禁止するポスターが貼(は)られているのに、また赤信号で道路を渡るのはいけないと学校などでいわれているのに、なぜやる人がいるのかと不満に思っています。どうしてみんな決まりを守らないのかと。そこで、みんながハッピーになる「決まり」について考えようというのです。

さて、みなさんはここまでの話を読んでどう思われましたか？ よくできた教科書だと思われたかもしれません。この話を読んで、みんながハッピーになる決まりについて考えた子どもたちは、「駆け込み乗車をしない」「赤信号では渡らない」という結論を導き出してくれることでしょう。そしてきつと、これからは駆け込み乗車を控(ひか)えるでしょうし、赤信号で道路を渡(わた)ることも少なくなるでしょう。でも、はたしてそれだけでいいのでしょうか？

「ハッピーマナー」は、^{*}指導要領との関係でいうと「集団・社会の公徳心・規則の尊重」に該当(がいとう)します。そこで、「心のノート」の該当箇所(かしょう)を見てみました。すると、四ページにわたって項目(こうもく)が割(わ)かれています。タイトルには「やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる」とあり、結論めいた箇所には「どんなときでもやくそくやきまりを大切に……これが人間のすばらしさです」とあります。あとは身の周りの「きまり」を書く欄(らん)があるだけです。

もうおわかりかと思いますが、教科書や「心のノート」がいたいことは、仲よく生活するために決まりを守ろうということなのです。当たり前じゃないかと突(つ)つ込まれそうですが、本当にこれを当たり前(あたりまえ)とっていいのでしょうか。⁽³⁾それが私の疑問(ごもん)です。

まず、「ハッピーマナー」の話で大前提にされていた、駆け込み乗車や赤

信号で道路を渡(わた)ることの禁止については、それが「決まり」であるということとで、この点については疑(うたが)う余地(よち)さえ与(あた)えられていません。

A なぜ駆け込み乗車はいけないのか、なぜ赤信号で道路を渡(わた)ることがいけないのか、そのこと自体を根源(げん)から考えさせることのほうが、本当(まこと)は大事なのではないのでしょうか？ 駆け込み乗車はポスターに禁止と書いてあるからだめなのではないはず(はず)です。赤信号でも、車が来ていなければ道路を渡(わた)っていいと考える文化(ぶんか)もあります。

したがって、日本という社会(しゃかい)において、なぜそれらが禁止(きん)されているのか、なぜその禁止(きん)を「決まり」にしているのかを論(ろん)じる必要があるのです。そうでないと、キム・ジョンウンがいつているからしたがうというのと同じ(おな)じになってしまいます。「そんなばかな」と思(おも)わないでください。戦前(せんぜん)の日本(にっぽん)では、そうやって教育勅語(ちよくご)に敬礼(けいれい)し、敬礼(けいれい)しない人は不敬罪(ふけいざい)に問(と)われかね(かね)なかったのですから。

これは北朝鮮(きたちょうせん)であつた話(わ)ではなく、数十年前(すうじゅうねんぜん)の日本(にっぽん)で当たり前(あたりまえ)のように行(な)われていたことなのです。いや、いまもなお同(おな)様の(よう)ことが行(な)われているといつても(い)カゴン(1)ではありませ(な)せん。それが駆け込み乗車(かきこみりやう)の禁止(きん)や赤信号(せきしんごう)での横断禁止(おうだんきん)なのかもしれ(し)ないのです。

それでも、もしかしたら、正しい決まりならやみくも(やみくも)に守(まも)らせたつていいじゃないかという人がいる(い)るかもしれ(し)ませ(な)せん。正しい決まり(ま)りとはい(い)った(い)い何(なに)なのでしょう(う)か？ もしその決まり(ま)りが本(ほん)当(とう)に正(ただ)しいなら、なぜ(2)それを破(やぶ)る人がいる(い)るのでしょうか？ そもそも決まり(ま)りとは何(なに)なのでしょう(う)か？ 順(じゆん)に考(かん)えてみ(み)ま(し)ょう。

まず決まりとは何(なに)かからい(い)きましょう。決まりとは、「道徳」の教科書(きょうこ)によると、みんなが仲(な)良く暮(く)らすための決(け)め事(こと)という(い)うこと(こと)になります。これは私も賛成(さんせい)です。人はひとり(ひとり)で生(な)きてい(い)るわけ(わけ)ではあり(あ)りませ(な)せん。私(わたし)たちは共(とも)体(たい)で助(たす)け合(あ)いなが(なが)ら生(な)きてい(い)るのです。B 人(ひと)がフクスウ集(あ)まつて共(とも)に行(な)動(どう)する(する)ところ(ところ)では、どこ(どこ)でも決(け)め事(こと)をセ(セ)ッテ(テ)イ(イ)します。友(とも)達(だ)同(おな)士(し)でも、学(がく)校(こう)でも、地(ち)域(いき)でも、職(しやく)場(ば)でも、そ(そ)して国(こく)家(か)でも。国(こく)家(か)の決(け)め事(こと)を法律(ほふ)律(りつ)とい(い)うわけ(わけ)です。

C 決(け)め事(こと)は、他(た)者(者)と共(とも)に何(なに)か(か)を(を)する(する)場合(ばい)の共(とも)通(つう)のル(ル)ール(る)とい(い)つて(て)いい(い)で(で)し(し)ょう。それ(それ)を決(け)めてお(お)か(か)ない(ない)こと(こと)には、お(お)互(たが)い(い)望(たの)ま(ま)ない(ない)行(な)動(どう)を(を)と(と)つ(つ)て(て)しま(ま)い、それ(それ)ら(ら)が衝(しょう)突(つ)する(する)こと(こと)に(に)な(な)ります。その(その)結(け)果(こ)、お(お)互(たが)いに(に)ス(ス)ムズ(ズ)に(に)や(や)り(り)たい(たい)こと(こと)が(が)でき(き)な(な)く(く)な(な)つ(つ)て(て)しま(ま)う(う)の(の)です。

決まりの本質がわかったら、人がそれを守らなければならない理由もわかると思います。それは自分がやりたいことをスムーズに行うためです。ではなぜ人は、そんな自分のための決まりをわざわざ破ってしまうのでしょうか？ これもじつは同じ理由からです。本来はルールを守るべきなのだけれども、時にはルールを破ったほうが自分のやりたいことをよりスムーズに実現できる場合があるのです。

D、その場合の問題は同じルールを共有している仲間に迷惑がかかる恐れがあるということでしょう。逆にいうと、仲間に迷惑がからなければ、ルールを破って自分のやりたいことを優先しても問題ないといえるかもしれません。いや、むしろそのほうが「ゴウリのだ」といえるでしょう。どうということかという点、誰から見ても非難されることが正しさの条件のひとつだからです。もちろん決まりを守っていれば、人から非難されることはありません。なぜなら、人に迷惑をかけることがないからです。とするならば、人に迷惑をかける恐れがないなら、ルールを破ってやりたいことを実現しても、それはやはり正しいということになるのではないのでしょうか？

以上の話を駆け込み乗車と赤信号での横断に当てはめてみましょう。すると、ドアが閉まりかけていて、人がたくさん乗っている電車で駆け込み乗車するのは、決まりを破っているうえに、人に迷惑がかかるから正しいとはいえません。赤信号でも、車が来ているような場合には、道路を渡るのには危ないので正しくありません。

しかし、もし誰も乗っていない電車で、ドアが閉まりかけているわけではないようなとき、遅刻しないようにその電車で飛び乗るのはいいのではないのでしょうか？ 赤信号で明らかに車が来ないようなとき、道路を渡るのもいいのではないのでしょうか？ そうした行為は正しいといえる可能性があるのでないのでしょうか？

私がいいたいのはそういうことなのです。このような考察を経てやっと、私たちは真の意味で道徳を身につけることができるように思うのです。誰かが正しいといったから正しいと思ひこむ、あるいは誰かが決まりだといったから守るようになるなどというのが道徳の目的ではないはずなんです。私たちが教育の場で道徳を学び教えるのは、本当の意味で正しく生きるためであるはずなんです。そのためには、物事を根源から考え直す必要があるんです。

(小川仁志『道徳』を疑え！)

95

90

85

80

75

70

65

★指導要領…文部科学省が告示する教育課程の基準。

問一 — (1) 『「ハッピーマナー」というタイトルの面白い話』とありますが、これは小学生に何を教えるためのものですか。解答らんに合うように本文中から二十文字以内で抜き出しなさい。

《二十文字以内》という点。

問二 (2) に入れるのに最もふさわしい漢字一字を答えなさい。

問三 — (3) 「それが私の疑問です。」とありますが、筆者は現在の道徳の教科書や授業に批判的です。それは現在の道徳の教科書や授業がどのような内容であるからですか。解答らんに一行ずつ、合わせて二行以内で説明しなさい。

問四 — (4) 「なぜそれを破る人がいるのでしょうか？」とありますが、その理由を筆者はどう説明していますか。四十文字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず「マスを用いること。)

問五 筆者は、人が必ず「決まり」を守るためにはどうする必要があると述べていますか。解答らんに一行ずつ、合わせて三行以内で具体的に説明しなさい。

問六 A、D に入れるのにふさわしい言葉を次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ところが イ だから ウ つまり エ そもそも

問七 — (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 決まりとは他者と共同で何かをする場合の共通のルールのことであり、これを決めておかないと自分がやりたいことを実現することはできない。

イ 決まりとはみんなが仲よく暮らすための決め事のことであり、このルールのおかげでそれぞれの人がやりたいことをスムーズに実現することができる。

ウ 決まりとは正しいことを守らせるためのルールであり、この決め事がなければ人は助け合いながら他者と共に行動していくことができない。

エ 決まりとは人が多く集まるところに必ず存在するものであり、このルールを守ることでは人は本当の意味において正しく生きることができない。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

星子の進路については、これまで兄妹で幾度も幾度も話し合いを重ねたはずだ。福祉を学んで、⁽¹⁾この町でそれを生かした仕事に就きたい、と願うことの方が、⁽²⁾兄は不服なのだろうか。

そこまで陸別に縛られなくて良い——友達にもそう言われたけれど、どうしてそう決めつけられてしまうのか、星子にはわからない。

そつと★ガンビーの顔を離れ、来た道を戻る。

左手に、昔ながらの板張りの廃屋が残っている。長い板材を横に用いて幾枚も重ねた外壁は、開拓時代の名残りの建築法だった。歪んだ窓ガラスは年代を感じさせる。大々的な町づくりが行われる以前の陸別町では、この形の住宅ばかりだった、と聞いている。

およそ防寒に役立ちそうもない、こうした儉しい住まいで、星子の両親は育ち、祖父母から前の世代のひとは生きたのだ。それを思うと、星子の心はしんと静かになる。

陸別が拓かれた時から、脈々と繋がれてきた町への想い。今は亡きひとびとの、町への温かな眼差し。そうしたものが年々削がれていくような気がして、星子は寂しくてならなかった。同級生たちの意識が町の外にあるからこそ、星子は町の中に目を向けていたい、と願う。そうした気持ちは、未だに両親が健在であったなら、持ちえなかったものかも知れない。

廃屋の前で立ち止まり、星子は深く息を吸い込む。見上げる空は十勝晴れ、雲ひとつない澄んだ青空だった。

「前に話した通り、帯広には優れた演技指導者のいる高校があるの。学校としても演劇部の活動に力を入れているし、あなたの才能を伸ばす環境も十分に整っているのよ」

月曜日の放課後、案の定、星子は校長室へと呼び出されて、校長と担任の二人から出願変更を勧められた。担任の熱心な説得を聞きながら、星子は膝に置いた手にきゅつと力を込める。

「私、志望校を変更するつもりはありません。このまま予定通り、置戸の高校を受けます」

固い声で答える星子を前に、担任はふうつと溜息を洩らし、校長に首を振ってみせた。

「そう簡単に結論を出さないでほしい」

30

25

20

15

10

5

それまでソファに深く腰掛けていた校長は、身を乗り出すようにして星子の顔を覗き込んだ。眼鏡の奥の瞳に有無を言わさぬ力が籠っている。

「君のお兄さんは、私にこう言ったんだよ。妹が兄である自分のことや、この町のことを想う気持ちはわかる。けれども、十五歳にはもつと選択肢があつて良い。妹には自分の人生を懸けて夢に向かって行く勇氣を持つてほしい、と」

★星子は半分泣きそうになって、きゅつと唇を引き結んだ。そんな星子の双眸を見つめて、校長はこう続ける。

「お兄さんの気持ちは大切に思うなら、せめて今夜一晚、自分と向き合つて考えなさい」

校長と担任のふたりに頭を下げて、星子は逃げるように学校をあとにした。

積雪の帰路にひとの姿はなく、星子はひとり、目を乱暴に擦りながら歩いた。声を上げて泣きじゃくりたくなるのを、辛うじて堪えていた時だった。

「星子！」

「星子、星子！」

坂の下から和美と春菜が大声で呼んでいる。

「ロケ！ 映画のロケやつてるよ！」

「分線の踏切んとこ！」

早く早く、とふたりは懸命に手を振った。

普段は通るひとも殆どない踏切周辺にひとが溢れている。いずれも知った顔ばかりだ。

「ああ、星子ちゃん」

その姿を認めて、少しずつ道を譲ってくれるのは、星子に撮影現場を見せてやろうと思えばこそなのだろう。導かれるまま、人垣の前に出た。

見せ場の撮影なのか、スタッフが固唾を呑んで見守る中、テレビで馴染んだ人氣の男優が相手役の頬を張る。手加減なしの、派手な音がした。

「一緒に行こう、って言ったじゃない。何処までも一緒に行こうって」

哀しい表情で男優に絡むのは、星子と四つしか変わらない若い女優だった。

——ぼくたち一緒に行こう。みんなの本当の幸を探しに、何処までも何処までも一緒に行こう——

星子の耳もとに、星子自身の声が帰ってくる。映画のロケの現場のはず

60

55

50

45

40

35

が、暗転して、真つ暗な舞台上に立つ星子を、ピンスポットが眩しく照らしていた。

封印したのに。

封印したはずなのに。

星子は自分の台詞を追い払おうと、両の手で耳を塞いだ。

「あ、星子」

両耳を押さえたまま人垣から離れた星子に、和美と春菜は狼狽える。

星子、星子、と周囲を憚って呼ぶ友の声を振り切り、星子はその場を逃げ出した。

何処をどう歩いたのか、あまり記憶がない。気付けば大通りから本證寺に続く長い階段の中ほどに座っていた。陽は落ちて、気温はぐつと下がっていくらしつかり着込んでいるとはいえ、冷気は足もとから這い上がってくる。

目を転じれば、まだひとが残っているのか、町役場の明かりが洩れている。カナダの姉妹都市にちなみ「ラコム通り」と名付けられた道をオレンジ色の街路灯が照らす。役場の背後には、黒々とした山のシルエットが迫る。高い位置から見渡す陸別の夜は、静寂で厳かだった。

さすがに歯の根が合わなくなって、星子はゆっくりと立ち上がり、階段を下りる。大通りを、こちらへ向かってくる一台のワゴン車があった。運転手が星子を認めたのか、車は緩やかに徐行して路肩に止まった。

「星子ちゃんじゃないか」

窓が開いて、声をかけてきたのは、天文台の青柳だった。

「どうしたんだい、こんなところで」

優しく話しかけたものの、青年は階段の少女が今にも泣き出しそうなのに気付いた様子だった。仄かな笑顔は消えて、案ずる表情になる。

「乗って」

手を伸ばして助手席のドアを開け、青柳は星子に言った。

銀河の森天文台、という美しい名前を与えられた天文台のドーム内には、百十五センチの口径を持つ反射望遠鏡が据えられている。公開されている天体望遠鏡の中で日本最大級、と聞いたことがあった。

月曜日の今日は休館日のため、ほかにひとの姿はない。星子は望遠鏡の台座に浅く腰かけて、青柳に今日の校長室での遣り取り、そしてロケ現場での出来事をぼつりぼつりと語った。星子が語り終えるまで青柳は辛抱強

く耳を傾けた。

「そうか、そんなことがあったんだ」

「そうか、そんなことがあったんだ」

「皆が陸別を離れていく。私まで出て行ったらどうなるの、とか。演劇をやって大成できるワケない、とか。色々考えたら、頭の中がごちゃごちゃになって……」

初めて素直な気持ち打ち明けて、星子は溢れだした涙を手の甲で力任せに払った。少女の様子を見守っていた青柳だが、見学者用のダウンコートを二着手に取ると、一着を星子に差し出して促した。

「寒いけど、ドームの外に出てみようか」

ドームの扉を抜けて、そのまま天文台の屋上へと出る。足もとは凍りつき、油断するとつるつると滑るから、二人は手すりにしつかりと掴まって天を仰いだ。

頭上に輝く天の川。大犬が小犬を追い駆け、オリオンは果敢に牡牛に立ち向かう。霞んでいられるのはプレアデス星団。ペルセウスにカシオペアの姿も見つけられた。まだ月の姿はなく、漆黒の舞台上に立つ星座たちの競演を遮る雲の幕もない。

「何て綺麗」

星子は手すりを持つ手に力を込め、背を逸らして天を仰いだ。

「この時期は一層、見ごたえがあるからね」

青柳は言って、同じように背中を逸らした。

暫くの間、互いの存在も忘れて、星々の姿に見入る。物言わぬはずが、無数の瞬きがこちらに語りかけてくるようだった。

「この星に魅せられて、僕は東京からここに移ってきたんだ」

青柳は星子に聞かせる風でもなく、ぼつりと呟いた。

東京から、と星子は繰り返す。

ああ、と青柳は視線を天空から傍らの少女へ移して、緩やかに口もとを綻ばせた。

「僕の実家はね、東京で半世紀以上続く和菓子屋なんだよ。一人息子の僕は、けれど、どうしても星への思いを捨てられなかった。そして両親も、跡を継いでほしいという気持ちで封じて息子の思う道を選ばせてくれたんだ」

初めて知る話に、星子は思わず目を見張る。

「だからだろうね、僕には康晃君の気持ち、僕の両親のそれに重なって仕方ないんだよ」

切なさの滲む口調で言って、青年は軽く首を振った。

星子は少し考え、やがて躊躇いがちに問いかけた。

「青柳さん、故郷の東京を出たこと、後悔してない？」

「してない」

一瞬の躊躇いもなく問いの答えを返したあと、それでは足りない、と思ったのか、青年は暫し考えて、こう言い添えた。

「これから齡を重ねて、取り巻く状況が違って来ればまた別なのかも知れない。けれどそれでも、やっぱり後悔だけはするまい、と決めているんだ。僕の夢を知り、背中を押してくれたひとたちの思いを無駄にしないためにも、故郷を出たことを決して後悔しない」

天文技師の言葉は、少女の胸に(4)。

会話は途切れ、ふたりは再び夜空を仰ぐ。

オリオン座のペテルギウス、小犬座のプロキオン、大犬座のシリウス。巨大な冬の大三角形の間を、長く尾を引いて星が流れた。それを機に、青年はおもむろに唇を解いた。

「故郷って、人間にとっての心棒なんだと思うんだ。そのひとの精神を貫く、一本の棒なんだよ、きつと」

星子は青年の言わんとすることを理解しようと、真剣な眼差しをその横顔に注いでいる。それに気付いて、青柳は少女に柔らかな笑みを投げかけた。

「町を去るひともある、戻るひともある。僕のように、新たにこの町に来るひとだっている。それでも、故郷という心棒を持たないひとはいないし、心棒があるからこそ、ひとは羽ばたく勇氣を持てるんだと思う」

羽ばたく勇氣、と低い声で星子は繰り返した。

星子の身体に流れる、両親や前の世代から脈々と受け継がれてきた血。陸別で過ごした日々。陸別で育んだ夢。そうしたものが星子を形作り、これからも星子を支え続けるに違いない。そう、たとえ陸別を離れたとしても。

——ぼくたちは何処まで行って行ける切符を持っているんだ——
独り芝居の自身の台詞が、はつきりと耳に届く。

「羽ばたく勇氣……」

160

155

150

145

140

135

星子はもう一度、繰り返した。

(高田郁『ふるさと銀河線』)

★ガンビー……この町のアートサロンで、地元の人たちが気楽に集まってお茶をする場所。

★双降……両方のひとみ。

問一——(1)「この町でそれを生かした仕事に就きたい」とありますが、星子がこの町から離れまいとするのはなぜですか。解答らんに一行ずつ、合わせて四行以内で説明しなさい。

問二——(2)「兄は不服なのだろうか。」とありますが、兄は星子にどのようなしてほしいと思っっているのですか。解答らんに一行ずつ、合わせて二行以内で具体的に説明しなさい。

問三——(3)「真つ暗な舞台に立つ星子を、ピンスポットが眩しく照らしていた。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに一行ずつ、合わせて二行以内でわかりやすく説明しなさい。

問四——(4)に入れるのにふさわしい表現を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 沁みた イ 手を当てた ウ 秘めた エ 打った

問五——(5)「血」とありますが、「血」を使った次の一～五の慣用句の意味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 血となり肉となる 二 血の通った

三 血のにじむような 四 血走る 五 血迷う

【意味】

ア こうふんして目が赤くなる。

イ 知識などがすっかり身につく。

ウ のぼせてわけがわからなくなる。

エ あたたかみのあるようす。

オ たいへんな苦勞をするようす。

問六

——(6)「もう一度、繰り返した。」とありますが、それはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青柳の話聞き、青柳の言った言葉や生き方にあこがれの気持ちをもったから。

イ 青柳の話聞き、青柳と自分は違う世界に住んでいることを気づかされたから。

ウ 青柳の言葉によって、今までの自分の思いをもう一度考え直そうと思ったから。

エ 青柳の言葉によって、兄や先生たちの言っていたことが初めて理解できたから。

問七

本文を場所の変化という点で四つの場面に分けたとき、第四場面はどこからですか。最初の五字を答えなさい。(読点や記号などがあれば、それも一字に数えること。)

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 兄や先生たちなど多くの人が星子の進路について助言をしてくれたが、それぞれ言うことが異なり、星子はどの意見に耳を傾ければよいのか悩んでしまった。

イ 兄も先生たちも青柳も星子の進路についてこの町に残る必要はないと助言したので、最初は反発していた星子もしだいにそう思うようになっていった。

ウ 兄も先生たちも福祉を学びたいという星子の思いを受け入れてくれなかったが、青柳だけはその思いを受け入れ、星子の進路についての助言を与えてくれた。

エ 星子の進路について助言してくれた人たちの中で青柳だけが星子の置かれた状況を理解してくれたので、青柳の言葉だけに星子は耳を傾けることができた。

